

## 4 青年心理と教育

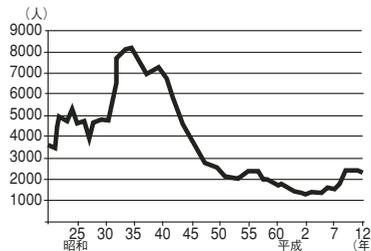
### 基本知識をインプット

現在は、青少年の犯罪はむしろ減少している。したがって、青少年の凶暴化などという現象は認められない。むしろ、現代社会が産業社会から消費社会・情報社会に変化するなかで、従来の価値感が青少年を取り巻く社会システムと適合しなくなっていると見た方がよい。

少年犯罪の増加？

- このごろ、少年犯罪の増加が盛んにいわれていますね。殺人などの凶悪事件がたくさん起こっているみたいですね。何だか、物騒な世の中になりましたね。
- 少年法の改正問題もかかわっているから、多少誇張して伝えられているみたいだけど、これには誤解があってね。統計を取ってみると、少年犯罪の件数は決して増えていないんだ。それどころか減少傾向にある。
- 本当ですか？ どんどん増加しているんだとばかり思っていましたけど。

●戦後の少年凶悪犯罪



出典：バオロ・マツァリーノ  
『反社会学講座』より

戦争直後の方が多

- このグラフでは殺人・強盗・強姦・放火を凶悪犯としている。ここには出ていないけど強盗が多かったのは、戦争直後だね。社会の混乱がひどかったからのようだ。そこから1960年前後にもう1つのピークがきている。この時代も高度経済成長で生活環境が大きく変わったときだね。犯罪が

現在は安定している

若者批判はいつもある

起きるのには個人の性向も関係しているけど、社会全体が安定しているかどうかにかかっている面が大きいね。

- そういう意味でいえば、現在は社会が安定していると…。
- そうだね。ここ2、3年を取れば増えているように見えるけど、前に比べれば増え方は微々たるものだね。むしろ統計だけからいえば、現在の60代の人たちが青少年であったときの方が凶暴であったかもしれない。
- 老人たちが「今の若い者はけしからん」なんて言うけど、彼らが若いときの方がずっと「けしからん」奴だったわけですね。
- まあ「今の若い者はけしからん」という言葉は、メソポタミアの古代文書にも書いてあったらしいから、永遠にいわれつづけるのだろうね。君たちが大人になったら、今度はもっと若い世代に言い返してやればいいんだよ。
- でも、きっとまともに聞いてもらえませんね。私たちがまともに聞かないように。

## TOPIC 1 少年犯罪は増えていない

統計から明らかなように、マスコミでいわれるわりには少年犯罪は増えていない。むしろ、長期的傾向としては減少している。ここ2、3年はなるほど増えているようにも見えるが、これも長期的傾向に比べれば、ことさら強調するほどではない。むしろ少年犯罪は、かつてないほど少なくなっているのである。では、なぜ少年犯罪が増えているような報道が世間でなされるのであろうか？

原因としては一部に見られる凶暴化・低年齢化・女性化の報道があろう。刑法に抵触する以前の年齢の少年によって、連続殺人や残虐な傷害事件が起こされる例が報道されたからである。実際は13歳以下の少年による犯罪は減っているのだが、マスコミも話題にしやすいのか、少年法を改正して、厳罰に処すべきだという議論も盛り上がった。

しかし、厳罰に処せば、残虐な犯罪が減るという保証はない。実際、神戸の連続殺人の少年なども刑法の14歳

### COLUMN

◎読書案内

マツァリーノという自称イタリア人の著書『反社会学講座』では、統計によれば、現在を憂える高齢者の方が、ずっと凶暴な少年だったと皮肉っている。この本は統計資料を使った知的エンタテイメントでお薦めである。

規定を知らず、いずれ捕まって死刑になると思っていたらしい。死刑を覚悟していたほどの確信犯なら、厳罰に処すことは歯止めにならない。このような青少年による凶悪犯罪は、ある意味で自殺の意味ももつといわれている。だとしたら、自分の生命の尊さを認識させた方が凶悪犯罪は減るかもしれない。

## 学校の崩壊

若者論の歴史

■日本では、ほぼ10年ごとに「若者はよくわからない」という議論が蒸し返される。10年前には「新人類」なんて言葉もあった。このように騒がれるのは、青少年が今までのような対し方ではコントロールしにくいと大人が思っていることの現れだろうね。とくに学校や教育は若い世代と直接に触れる場所のためか、さまざまなところで問題にされているね。

●しばらく前に「学級崩壊」などという現象がありましたね。

■その前は「校内暴力」や「いじめ」だね。もっと前には「大学紛争」なんてのもあって、だんだん問題が下に降りてきている感じだね。今では「教育困難校」などという言葉も定着して、そういう学校では、だいたい授業自体が成立しない。私もちょっとだけ経験があるけど、授業時間に行っても生徒がだれもない。あるいは、全員が歩きまわっていて、まず席に着かせるところから始めなきゃならない。これが小学校1年生からあるというのだから、教師も大変だね。

小学校の役割

●でも、私も覚えているんですけど、小学校1年生というのは、じっと席に着いていられないことが多いのじゃないですか？ とりあえず45分座っているだけでも大変だった気がするけど…。

■そういえば、私も小学校1年のときは、授業中にお漏らしばかりしていたね。それが教壇で教えているのだから、隔世の感があるね。

●じゃあ、何も変わっていないんじゃないですか？

## 親と学校の関係

■ところがそうでもないんだ。前に比べれば、その度合いがひどくなっているんだそうだ。しかも、ある中学校教師は「教育は学校でするだけでなく、地域や親のバックアップがあって、初めて効果が上がる」と言っているが、その「地域や親のバックアップ」がなくなったというんだね。

● どういうことですか？

■ 前だったら、親が「先生の言うことを聞きなさい」と子供を叱ることが多かったのだけど、今では「どうしてウチの子ばかり叱るんですか？」と文句をつけてくるらしい。

● 親が学校に協力しなくなったんですね。

■ というより、**親が子供と結託して、学校と対抗するようになった**らしい。教師は児童・生徒に対するとき、いつも親とのトラブルまで予想しなければならない。これでは確かにやりにくいよね。

● でも、学校でも「M教師」などと教育に不適格な先生が出てきましたよね。親の方も学校を信頼しにくいんじゃないですか？

■ こんなふうになったのは、人事の停滞も大きいかもしれない。少子化とともに学校の先生になるのも大変な勉強がいるようになった。実際に子供と遊ぶのが好きな人というより、地域の秀才か有力者の関係者でなくては、教師になりにくいというような事態もあったらしい。なかには多少変な人もまじってくるよね。

さらに問題なのが、情報社会の進展だ。以前のように、学校が社会についての情報を独占できない。TVなどで、現在の社会の動向が直接子供に入ってくる。そうすると、子供の方では教師の指導を相対化してしまおう。「指導が入らない」なんて言い方を教師側がするようになった。

親と子供の結託

人事の停滞と情報社会

## TOPIC 2 産業社会からの転換

1990年代から、日本の社会がポスト産業社会・情報社会に入ったことは、社会の構造・価値観を大きく変える

●コンピュータを使って仕事をする人々



階層化が進んでいる

競争が起こりにくい

とともに、教育現場に混乱をもたらしたともいえる。産業社会では、集団行動が優先された。工場の作業では、他の労働者と協調しながら、作業することが求められる。したがって、規律への服従や協調的な態度、さらには能率的な集団行動という面が教育でも求められることになる。

ところがポスト産業社会、とくに情報ネットワーク社会では、そのような能力はコンピュータが担うことが多くなる。たとえば、本は筆者が書いて、それを印刷所が活字を組み、印刷するという工程をたどった。ところが、現在では筆者がコンピュータを使って活字を組むところまでやってしまうなどということも可能になった。このようなやり方では、1人でできる部分が多くなってくる。したがって、規律への服従や協調的な態度はそれほど必要ではなくなり、むしろ既存の認識枠を組み替えて新しいものをつくり出すなどのイノベーションの部分が多くなる。したがって、教育でも「個性の強調」などという方向が強くなるのだ。

## 教育の階層化

■もう1つのポイントは、教育の階層化への動きだね。

●階層化って何ですか？

■社会の中で恵まれた集団とそうでない集団が明確に分かれてきてしまうという現象だね。たとえば、東大に入学する学生の親は、他の大学の学生の親に比べて、年収がかなり高いし、学歴も高い。つまり、学歴の高い親でなければ、子供も学歴が高くないという傾向があるんだ。

●じゃあ、自分の生まれによって将来が決まってしまうわけですね。

■一種の「身分制」あるいは「カースト」社会といってもよいかもしれない。当然のことながら、そういう身分制社会では努力してもあまり意味はないから、近代のように激烈な競争は起こりにくくなるね。

●なるほど。でも、ある意味では、競争なんかしなくていい

不満が高まる可能性

から、気分が楽になっていい、という面もあるんじゃないですか？

■それが、身分制社会の良い面ともいえなくはない。しかし、逆にいうと身分によって可能性が限定された社会にもなる。とくに下の方の階層に生まれた人で意欲がある人は、上昇の機会がなくなって、かなり不満が溜まるということはあるだろうね。

●そういえば、犯罪者は知能が高い人が意外に多い、という話も聞いたことがあります。能力があっても生かす環境がないから、犯罪に走るのかもしれないね。

### TOPIC 3 中流の崩壊

●日本ではブルーカラーとホワイトカラーの差は小さい



90年代初めまでは、日本の60%以上の人自分が「中流」だと意識していた時代であった。これは他の国からすると、驚くべき高率である。たとえばアメリカでMiddle Classというと、かなり比率が少なくなり、いちばん多いのがWorking Class（労働者階級）ということになる。しかし、日本では工場労働者などのWorking Classも終身雇用で月極めの賃金をもらうなど、ホワイトカラーとほぼ同じ扱いを受けていたので、このような意識になったのであろう。逆にいうと、Working Classの子弟であっても、Middle ClassやUpper Middleになれるという意識が広がり、階層移動を目指して激烈な競争が繰り広げられた。しかし、高度成長の終わり、日本経済の拡大がしだいに頭打ちになるとともに、皆で豊かになるという状態は終わり、階層間の不平等が問題になったのである。この「階層化」は、さまざまな社会調査によってほぼ実証されてきたが、これが「等質」といわれてきた日本社会にどんなインパクトを与えるのかは、まだ結論が出ていない。若い世代が「努力しても仕方がない」と思ってしまう社会は、はたして「幸福」といえるだろうか？

## 演習問題にチャレンジ

●以下の文章は、高等学校の教員である筆者が学校の崩壊について述べたものである。筆者の指摘している崩壊の要因をまとめ、それについてあなたの考えを、近代と現代の関係に留意しつつ、600字以上1200字以内で述べなさい。  
(2003年、早稲田大・法センター)

話を10年ほど前にもどす。授業中にたび重なるお喋りを注意され、教科担任にシャープペンシルを投げつけた生徒がいた。「自己」の欲望がじっとしてられない、お喋りしたいのである。学校らしい理由を聞けば、〈授業が分からなかったの、ついお喋りをした〉と答えるかもしれない。授業中であることや教室の中であることなどの公共性は、彼にとって大した問題ではない。お喋りしたい「自己」の欲望が優先する。

この日も教卓のすぐ前の席で、体の向きを横にして隣の生徒やうしろの生徒と喋っていた。2度3度と注意したら、〈授業はちゃんと聞いているよ。これぐらい喋ったって邪魔にならねえだろ〉と言いつつ言い返した。教科担任が〈とにかく、きちっと前を向いて静かにしなさい〉と、さらに注意。生徒は、せっかくなしく喋っている「自己」の自由が犯される。〈前を向かなければならないって誰が決めるんだ〉と「自己」の絶対的自由を主張し、〈出て行け〉と言われてシャープペンを投げたとのこと。

指導処置（校長の注意）の申し渡しには母親が来た。母親は指導処置に納得しない。〈どうしてうちの子だけが一方的に罰せられるんですか。相手の先生もここに連れてきて下さい。喧嘩両成敗でしょ〉と言いはる。初めて聞いたときはびっくりしたが、親がこういう態度をとるのは、いまではふつうだとのこと。

2年生の女子生徒が、カンニングペーパーを答案の下に入れてテストを受けているのを発見された。彼女の内面には自分を正当化する根拠がある。彼女の「自己」にとって、不合格になって留年したりすることは不利益だから、それを回避する正当性がある。ただ、それは学校に受け入れられないことは承知している。だからといって、学校側の論理に全面屈服することは、彼女の「自己」の誇りと利益が許せない。彼女には、自分の「自己」を守る理由と根拠があるからである。

だが、その「自己」の正当性を展開すれば、学校側の論理と真正面からぶつかることになるので、敗北は必至である。そこで、彼女はおそらく無

意識に論点をずらす。たとえば、カンニングペーパーは作ったことは認めるが、カンニングをやる意志はなかったという風に。ただ憶えるために作ったのであって、カンニングをするためにではないといった風に。

今回は、もう少しリアクションがひねられていた。発見されたときや、その後の教師の対応を衝くのである。申し渡しに同席した父親は、〈子どもは泣いてカンニングなんかしていないと言っています。監督の先生も生徒指導の先生も、本人の言うことを聞いてくれなかったそうじゃないですか。こんな傷つきやすい年頃の娘に、もっときめ細やかな配慮があつてしかるべきでしょう。疑わしきは罰せずとも言いますよ〉と言う。(中略)

学校が「産業社会的」なモラルに依拠して生徒を教育しようとしているのに対して、かなりの家庭では「産業社会的」なモラルが消失しつつある。「産業社会的」な道德観は、ヨーロッパでつくられた近代の道德観の延長線上にある。勤勉とか努力とか真面目とか公正さのようなものが、それに当たる。マックス・ウェーバーの言う「プロテスタントの倫理」である。こういう質のモラルティは、70年頃にその魅力を失い、80年にはほぼみんなが目指すべきものとしての指標性を喪った。「カーラァス、なぜ泣くの。カラスの勝手でしょ」とテレビの前で子どもたちは声をそろえた。

むかしは、そのような硬質なモラルティの喪失は、戦後的な理念や思想が十全に成熟しないうちに、その内部の軟弱な要素（私生活中心主義）が表面化したと考えていた。いまは、近代の先の「超近代」「超資本主義」がその姿を現した結果、近代のパラダイム\*1では解けない人間の要素が出てきたと考えている。こういう傾向は私たちの道德的退廃というよりは、社会の生産様式や生活様式、そして情報メディアの生み出している「新しい人間の傾向」と考えた方が正解であろう（だからといって、とにかく肯定すべきだという立場はとらない）。

だから、家庭で親たちが近代的な意味での親としてのプラス的な教育力を喪失したのは、彼らのモラルティがモラルティとして墮落したのではなく、家庭での子どもとの硬質な教育関係が立ちゆかないほど、人間を「新しくする」社会システムの力が教育力として強大〔となったため〕\*2であるともいえる。とにかく、学校という教育をする近代の器から見ると、親と子が精神的に密通している、野合しているとさえ思えることがある。

現在の「消費社会期」の生活や労働のありかたが、一方で物質的な快適さをどんどん生み出している反面、精神的な面あるいは感性的な面において、私たちのこのジャパンローカルが形成してきた人間本体のコアの部分